

序論

なぜまたマルグリット・ド・ヴァロワの新しい伝記なのか。

アンリ四世の最初の妻にもっぱら関わるフランス語の作品を数えるだけでも、二十世紀には既に十一の伝記が書かれ、最後の二作品は一九八五年と一九八八年刊である。この好色でコケットなマルゴ王妃について全てが言い尽くされてはいないのである。いや反対に、この女性についての書物が出ればでるほど、この歴史上の人物からより遠ざかるといえるのが、逆説的に思われようが、しかしながら事実なのだ。実際、マルグリットに関して真面目に取り組まれた最後の作品は一九二八年刊のものであるが、とても満足のいくものではなかった。それ以降、せいぜいそれを繰り返すだけで、最悪の場合それを無視している。大抵はできあがった伝説を飾ることで満足し、その伝説は百五十年前からルネサンスの最も偉大な女王の一人に関する知識考

察に取って代わっている。

それというのもマルグリット・ド・ヴァロワは真の研究の対象と見なされなくなったからである。いつからだろうか。それを言うのは難しい。一八四五年、アレクサンドル・デュマの『王妃マルゴ』が出版されたとき——この小説は最も博識な研究まで「汚染」することになる——カトリューヌ・ド・メデイスの末娘はすでにフランス史で最も有名な人物の一人であり、その思い出は様々な伝統によりすでにかなり歪曲されていた。諷刺文書作者、歴史家、そして小説家、劇作家、詩人、台本作者、政治家は、何代にもわたって、あるものはこき下ろすために、またあるものは誉めそやすために、この女性を横取りし、それぞれは理解するのではなく、象徴として把握して、その時代社会において、自らの信じる、そしてこの王妃が例として役立ちうる闘いを行おうとする。

何の象徴だというのか。多分それこそマルグリット伝説の最大の説明となるものだ。マルグリットは非常に多くのことを表していた。サン・バルテルミーの大虐殺を始めた永遠に罪のあるあのヴァロワ・メデイチ家の一員だった。何世代ものあらゆる屋と外国嫌いにとっては、フランスにイタリヤの「退廃」——エロス、ホモセクシャル、梅毒——を移植したことで、また有罪である。ジャン・ピエール・バブロン¹の文によれば、「上流の女性が西洋世界を（占めていた）時期」に王妃であり、自分の役割を果たすことを止めなかった。外交官として、不平

党（マルグリットの弟アラソン・ソムア）の仲間として、王権に対立する者として、ブルボン王朝初期を支持するものとして役割を果たした。当代の最大の文芸保護者の一人であり、ネオプラトニズムの司祭、田園詩のフランスへの導入者、マレブル論争の鼓吹者であった。そしてさらにそれ以上だった。対抗宗教改革を作り出した人、作家、独立した女性、博識で、生涯の終わりには、フェミニストでさえあった。

歴史におけるヴァロワ家あるいはブルボン家の役割、君主制の合法性、貴族の役割、カトリックの有用性、女性の教育権、両性間での政治権力の分割に関する各人の意見に応じて、マルグリットには多くの敵がいることだろう。しかし賛美者もまた多く存在する。十七世紀初頭から大戦まで、ナヴァールの最後の王妃に夢中になった。礼賛者となす人の間で、マルグリットは「動物」あるいは「軽信家」として扱われ、相矛盾する資料が振り回され、主張をよりよく証明するために情報源が偽造され、お互いに叫びあった。一致したことは何一つない。政治的役割でも、私生活でも、証言の価値についても。しかし『回想録』は読まれ、当時の最も興味深く最もよく書かれたものに数えられたのだった。

この情熱は枯れてしまった。二十世紀は、あらゆるジャンルの研究に熱中しているが、フランスルネサンスが提供した最も精神的で最もおしゃべりでない作家の一人の作品を読むのを放棄したように、アンリ四世の最初の后が誰であったのかを理解

するのを放棄したように思われる。二十世紀にはマルグリットについて、途方もなく軽率なこと、この上ない下劣な言葉が書かれるがままになっていて、誰もほとんど気を悪くすることがない。今日では現代人が知っているのはマルグリット・ド・ヴァロワではなく王妃マルゴである。とはいえデュマの小説におけるマルゴなのかは確かではなく、『フランス史の恋の話』は四十年前から非常に売れ——そこではマルゴは主要な「ヒロイン」の一人である——大小の歴史家がこの事実、噂話、幻想の奇妙なごたませと喜んで競っている。この二十世紀の末には王妃に関する「知識」はほぼ次のように要約されると言えよう。文芸を愛した、陰謀を愛した、しかしそれ以上に男たちを愛した、そして三人の兄弟たちをも愛した、と。

ときには、より深刻な主題を扱う書物の二つの文の間で、碩学が抗議する。いや、王妃はそれだけではなかった。いや、言われるほど腹黒くはなかった。いや、多分余りに男を愛しただろうが、兄弟は違う。それより先に行くものは稀である。確かに、山とある本当らしくないことや中傷は疑わしいが、真面目に問題に取り組まねばならない、そしてまさしく、マルグリットは真面目な主題ではなく、最早そうでない。それに、これらの中傷や本当らしくないことにずっと以前から導いている、押し寄せる資料を前にして、どこから始めるべきなのか。さらにこうした評判には、実際、何かしら本当のところはないのだろうか。研究が——必然的に長くなるだろうが——何らかのさら

なる「手紙」、少なくとも何らかの愛人にしか行き着かないなら。それなら、物笑いになる危険を犯して、明白な力を持つ神話になぜ取り組むのか。そんなことはやめて、慎重に本題に戻る方がよいだろう。

しかしながらそう見える以上に危険な企ては興奮させる。第一にマルグリットは孤立したケースでないから。マルグリットは歴史が罵倒するのを止めなかつた家系に属しており、今日、ようやくその不正が検討され始めた。母、カトリーヌ・ド・メデイシスが十九世紀の中ごろから名誉回復を始めたなら、兄アンリ三世は、死後横たわっていた底なしの穴からおおぞと出るのに、二十世紀の前半を待たねばならなかつたし、本当の初めての伝記が書かれたのは一九八〇年代でしかない。また同様に兄のシャルル九世はまだそうではないが、その名誉回復はサン・バルテルミーの何人かの歴史家によって近年始められた。末弟のアランソン公フランソワに関しては、あまりに忌まわしい評判を疑わしく思い始めているのは、まだ少数の碩学だけだ。マルグリットのイメージの回復は従ってルネサンスに関する研究の近年の更新に結びついており、長い間伝記の代わりとなつた愛人のリスト以上に、そこに発見すべきことがあるのはいささかの疑いもない。

マルグリットはまた、過去の政治的、文化的生活で女性が占めていた位置の、その幅はまだ想像できないが、再発見に結びついている。私は「再発見」と言ったが、十六世紀史の貴族政

での役割はヴァロワ家の君主の役割に反しており、この役割は情念が消え去り資料が忍耐強く明るみに出された後で、ようやく党派的分析から解放されえたのであり、貴婦人の役割はまず現実を経験されたこと、次に実際に知られていることであつた。そしてこの知識は消えてしまった。さて、記憶の消失は、ここでもあそこでも、その役割を果たしたとしても、この消失に責任があるのではない。この知識はさまざまな、繰り返される、一貫した攻撃の対象であつたのであり、その攻撃は、それをくじき、次いで無効にすることを狙つていた。ジャクリーヌ・ド・ロンウイ、ルイーズ・ド・クレルモン、タラール、アンヌ・デステ、あるいはクロード、カトリーヌ・ド・ダンピエールの痕跡を探すために、カトリーヌ・ド・メデイシスの周囲で三十年間この女たちがどのような役割を果たしたかを理解するために、今日フランス史を繙いても、空しく目を疲れさせるだけである。三世紀の間これらの名を消すために努力がなされ、ギーズ、コンデ、ロアン、ユゼス、レの女性たちのかつての力が持ちえた思い出まで消し去つた。マルグリットを再発見するのは、従つて世界全体を再発見することであり、その歴史は長い間孤児である。

それはまた時間旅行でもある。実際、その人となりに関して発せられた最初の論に遡り、誰が、いつ、なぜそれを作つたかを問うことなしには、この女性がどういう人であつたのか知ることはできない。どのようにしてこれらの最初の意見が知られ、

受けいれられ、退けられ、忘れられたのかを理解しようとせず
に、どのように、いつ、何から、何の目的で他の意見が形成さ
れたのかを理解しようとせずには、できない。そしてこの調査
は、非常に面白く、探求の最も現代的な関心に呼応する。とい
うのもこの堆積の過程を追うのは、マルグリットの物語がどの
ように作り上げられたかを単に把握することではなく、さらに、
非常に具体的に、どのように歴史が形成され、書かれ、変形さ
れ、再び創造されるかを把握することでもあるのだから。どの
ように知識が偽りの知識となるか、どのようにイメージは「知
的な著作」と「民衆的著作」の間で、歴史と文学の間で、文学
と二次的な文学の間で行き渡るか、いかにして知識は変形し、
各時代の関心に応じて軽くなりあるいは豊富になるか、いかに
して神話が誕生するのかを把握することである。この意味で、
この王妃は単なる一事例に留まらない。王妃は多分、同じスケ
ールの他の人物、特に他の女性に何が起こったのかを理解するこ
とを可能にするモデルである。

次に、はっきり言わなくてはならないが、企ての中心には、
何よりもマルグリット自身がいる。個人として、複雑な、驚く
べき人柄で、時には途轍もないが、特に才能のある作家、回想
録作者、弁護人、書簡作家、女流詩人である。後者の特徴がな
ければ、前者の特徴は実際どうなるだろう。エピナル画のイメ
ージ、歴史書の活気のない姿で、時々、学者が、辛うじてかき
乱す。疑いもなく、マルグリットがこれほど著名であり続ける

のは、書いたから、何世紀も、『回想録』の熱い皮肉な声を聞
かせるからであり、その声は弁護の傲慢な声、その書簡の交互
に快活な、おもねる、強情な声、その詩の甘い嘆く声で、要す
るにマルグリットを旧制度の最も魅力のある作家の一人とする、
あの模倣できない声だ。

この声をマルグリットの生涯に全面的に当てたこの書の前半
で多く聞かされる。第一に王妃が自身の主要な証人であるから
だ。次に、『回想録』がよく知られているとしても、マルグリ
ットの書いた残りのものはずっと、あるいはまったく知られて
いないが、それらは多面的なこの人格について欠くべからざる
説明を提供するからだ。最後に、これらの引用は王妃の文体、
王妃のいくつもの文体についてイメージを抱き、作品の深い統
一を把握することを可能にする、少なくとも私はそれを希望す
るからだ。もちろん、それが唯一の接触の方法ではないだろう。
王妃の言葉は、可能な限り、同時代人の言葉と比べられ、後代
がなした研究の批判を受けるだろう。この交差は、大抵、王妃
の供述の信頼性と、言い落とし、あるいは偽りの理由を明らかに
にするだろう。歴史の代わりになることはないが、この研究は、
マルグリットが生きた、それを考慮しなかったならいかなる点
で階級、性、環境に適合したのか、そしていかなる点で深く独
創的であったのか分からない、政治的、社会的、イデオロギー
的、道徳的文脈を注意深く再構成するだろう。

この声はこの著作の第二部では黙し、王妃をいつも間近に知

つていたわけでないが、それでも王妃について語っている者の無数の著作に場を譲るだろう。嘲弄する者たち、パンフレット作者、近い、あるいは遠い証言者、公式の歴史を作るために正当に報酬をえている歴史編纂官、真実を追求する哲学者、才能のある、あるいはない夢想家、最善の、あるいは最悪の意図に駆り立てられた伝記作者、偶然に出会った見知らぬ友、あるいは敵。そこでもまた引用は多いが、これらの人たちの声を聞くためであり、この人たちの考え、賞賛あるいは呪詛を要約しては効果がなかっただろうからだ。第一に、私の言うことは信じられなかっただろう。第二に、あちらで書き写された文からこちらで繰り返された言葉へ、王妃の伝説が形成された信じがたい織物をたどれなかっただろう。

各時代が「それぞれの」マルグリットをどのように再発見したかが観察されるためには、もちろん年代順に取り掛からなくてはならなかった。取り上げた時代区分は伝統的に歴史家が基づくものである。それは便利な枠組みで、そのうえこの神話の進化の大きな段階に見事に対応している。これらの大きな時代の内部に、より細かい分割がなされるが、この過程が最も理解しやすいのはほとんど「世代」の点においてであるからで、一つの年齢層の確信と情熱は次の層では理解不能になる。他方、ジャンルの再統合も、知識の各分野に固有の論理の把握が可能になるようになされたが、そのどれもが、他の分野に対しても、社会全体に対しても、「遺漏」のないわけではない。

私は、私より前にマルグリット・ド・ヴァロワに関して意見を表明した大部分の注釈家のイデオロギイ的読みを告発するが、もちろん、私自身が個人のイデオロギイ的読みを行うことを、私の著作で、私の時代の、私の社会集団の、私の性のものである問い、仮説あるいは位置取りに導かれたことを意識している。少なくとも、私は、マルグリットの再評価を呼びかけ、マルグリットのヴェルチュガダン（十六、十七世紀にスカートをふくらませるために用いられていたのでは）の秘密よりもむしろ政治的文学的能力に注意を引くことで、過小評価する伝統に反対し、私たちの過去の、より複雑な——より興味深くもある——再構成に与ろうとする気持ちを抱いている。王妃の著作が再発見され、研究され、決してマルグリットの場所であることを止めなかったであろう場所に、マルグリットがかくも名譽となる、わが国の文化的遺産を再統合するために、今日この再評価が必要である。

マルグリットに席を譲る前に、この研究期間に私を助け、力づけ、支持してくれた何人かにここで感謝することを許された。まずは博士論文の指導をされたマドレーヌ・ラザールに。彼女はこの研究の道に私を向けたのみならず、私の興味が向かうところに行かせてくれた。次に私の博士論文の審査員であったジャン・バルサモ、マリ＝マドレーヌ・フラゴナール、アラン・ヴィアラに。彼らは出版に相応しくなり、常に改善するように、私の注意を私の著作の不備、さらに欠点に向けてくれた。最後に、ジョエル・ヴィエルに。彼女は辛抱強くこの本のペー